海外における日本語研究

カイザー　シュテファン

1　展望の方法

2年間という限定された期間とはいえ，海外日本語研究をすべて把握し，目を通すことは，この著者には無理である。あるいは，英語で書かれたものに限定しても，入手しにくい雑誌などもあり，現実的ではない。かといって，過去2年日本語のどんな問題がどのような手法で研究され，どの文献が参照されたかなどという大きな流れを押さえることができれば『国語学』の読者の参考になることはいうまでもない。そこで，サンプルを取り出し，検討を加えるという方法をとってみた。

サンプルの選び方にはいろいろ考えられるが，身近なところで比較的簡単に閲覧でき，製本などされる前に複写できたりするという条件などで付録1にある雑誌・号（雑誌によっては，不明な理由による欠号も含む）を選択し，日本語にかかわる論文をすべてサンプルとして収集した。なお，対象は雑誌論文だけで，論文集や単著などは含めていないことをお断わりしておく。

結果として，サンプルは72編の論文（あるいは論文に準ずるもの）からなっている。なお，著者・タイトル・掲載雑誌などの詳細は付録を参照のこと。

2　サンプルの研究対象・方法

どの言語現象を研究の対象としているか，それにあたってどのような枠組み・方法を使ったか，また参考文献の言語（英語・日本語で書かれたものとどちらを多く利用しているか）については，以下のように一覧表にまとめてみた（表1）。なお，論文番号に星印が付してあるものについては，後にやや詳しく取り上げる。

表1　72論文の対象・方法など

No	問題・研究対象	枠組み・方法	参考文献言語（除く：資料）
1	状態性述語のガ・ヲ使い分け	Hopper & Thompson (1980) 他動性理論	英＞日
2*	女房ことば・遊女語	言語とジェンダー論	日＞英

3	成人学習者のリーディング方略	発話思考法・アイデア・ユニット	英
4	外国人の日本語に関する日本人の態度	アンケート調査	英>日
5	源氏物語の語り上の距離と認識様相標識/感覚・情緒の形容詞	ナラトロジー(物語り論)	英>日
6	引用助詞「だって」	談話分析・認識の仕方(evidentiality)	英>日
7	「自〜する」漢語動詞	記述・再帰性の類型論	英
8	口頭能力テスト(OPI)の妥当性	2種テストの実施, 結果分析(相関)	英
9	民間会社の敬語訓練マニュアル	社会的機能・イデオロギーの観点から	英>日
10*	古代語「トル(甲乙類)」の意味	データの分析・限界相・非限界相(telic/atelic)	英>日
11	句構造の理論	普遍文法, GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英
12	数詞・数量詞のかきまぜ(scrambling)	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英>日
13	multiple sluicing(多重疑問詞)	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英
14	複合動詞	動詞連続(serialization), 句構造	英>日
15	形容詞・形容動詞の句構造	拡散形態論(Halle and Marantz 1993)	英>日
16*	テイルの意味	形式意味論	英>日
17	主要部内在型関係節(head-internal RCs)	生成意味論	英>日
18	連用形名詞(〜かけの〜)	相役割(Tenny 1994)	英
19	日韓与格主語構文	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英>日
20	等位接続における省略	Higher Order Unification (Dalrymple *et al* 1991)	英
21	就学前の日本人児童・家族の言語使用・ニーズ	アンケート調査	英>日
22	学習に関する日本人父兄とカナダ人教師のビリーフ	半構造的面接調査	英>日
23	非母語方言アクセントの知覚	実験	英>日
24*	家庭における母子会話	「言語の社会化」(Schieffelin & Ochs 1986等)・収録データ分析	英
25*	家庭における母子会話の「-ちゃう」	言語の社会化・収録データ分析	英>日
26*	日本の小学校教室における会話	言語の社会化・収録データ分析	英
27*	海外日本語学校(イマージョン)における第二言語習得	言語の社会化・収録データ分析	英>日
28*	海外大学の日本語教室の会話	言語の社会化・収録データ分析	英

29*	成人学習者の～ネ誤用	言語の社会化・収録データ誤用分析	英
30	公の場の会話における「すみません」の機能	収録データ分析・remedial/supportive interchanges (Goffman 1971)	英＞日
31*	「すみません」「ありがとう」の会話機能	収録データ分析，アンケート調査	英＞日
32	英・日語の発話ターン交代と文法構造	データ分析・ターン構造単位(turn-constructional unit)	英
33	間接的依頼表現	アンケート調査・会話データ分析	英＞日
34	心理的距離標識「って・なんて」	収録等データの分析・話者の「情報の内在化」(incorporation of information)	英＞日
35	多読単漢字の発音潜時	実験	英＞日
36	ガ-ニ-ヲ能動・使役文処理の母語話者・学習者比較	動詞の行動者特定に関する実験・誤りに対するフィードバック効果	英
37	同音単語のアクセントの違いが心内辞書接近に利用されるか	実験	英＞日
38	日本語各種埋め込み文の複雑度	アンケート調査・Syntactic Prediction Locality Theory (Gibson 1998)＝短期記憶負担の観点	英
39	「-さ・み」接尾辞の生産性	正常者・脳損傷患者に対する実験・Dual mechanism model (規則・不規則形態脳内別処理モデル)	英＞日
40	英中日語数量詞の作用域	GB/極小理論 (Chomsky 1993/1995)	英
41	日本語学習者の認識論上・語学学習のビリーフ	アンケート調査	英
42	日本語学習者のテンス・アスペクト習得	実験・Aspect hypothesis (Robison 1990)	英＞日
43	発話ターン交代・あいづちにおける文法・韻律の役割	地図課題コーパスデータの分析	英＞日
44	情報の構造と談話速度変化の関係	地図課題コーパスデータの分析	英＞日
45	「人格」概念の起源と発展	明治～昭和文献における意味・背景分析	日＞英
46*	テイルの二義性(結果・進行)解釈	Strength of evidence (動詞の動作が認識可能な痕跡を残す度合)	英＞日
47	国語作文(説明文)の分析的評価表開発	教師に対するアンケート調査	英＞日

48*	日英語アクセントパターン変化の原理	発音・アクセント辞典，インフォーマントによるデータなどの分析	英>日
49	ワ・ガ省略	数種類の参加者・性別組み合わせ会話データの因子分析	英>日
50	英日語における埋め込み主題文	GB 理論	英
51	牽引(Attract) F 理論(Chomsky 1995)	英・日語の検討・極小理論 (Chomsky 1993/95)	英
52	英・日語疑問文	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英
53	日本語のかきまぜ(scrambling)	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英>日
54	日本語のゼロ目的語構文	GB 理論，ゆるやかな同一性(sloppy identity)	英
55	日・英語のパラメータ化した融合(merge)	GB 理論	英
56	埋め込み構造における空補文	GB/一致に基づく核理論(Agreement-based case theory)	英>日
57	日本語学習者の OPC (overt pronoun constraint, 可視代名詞制約)という普遍文法規則の把握程度	成人日本語学習者・母語話者に対する文解釈の実験 (「誰が今日彼が遅くなるといっているの?」における「彼」の照応判断)	英
58	モダリティー標識機能としてのダ	漫画・小説の実例検証	英>日
59	第二言語学習における教師によるモデル提示・学習者の誤りを教師が言い直す(recast)の効果比較	成人日本語・スペイン語学習者に対するゲーム実験	英
60	片仮名音符の有無の疑似漢字の記憶における母語文字体系の影響	成人日本語学習者(英・韓国・中国語話者に対する実験)	英
61	米国の初中等教育におけるアジア言語の動機づけ	アンケート調査・因子分析	英
62	談話分割(あいづちなど)の分析	構文より文化・言語特有の社会的機能から分析の必要性主張	英
63	バイリンガル幼児の言語混合(mixing)・使い分けの性格	日・英語バイリンガル幼児・両親の縦断的事例研究	英
64	独・日語におけるかきまぜ(scrambling)	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英
65	英・日語におけるかきまぜ(scrambling)	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英
66	日本語における論理形式(LF)下設の条件(Subjacency condition)の検討	GB/極小理論(Chomsky 1993/95)	英
67	幼児の発生発達におけるリズム行動と規範的喃語の関係	日本人幼児に対する実験	英>日
68	英日語の「出る・入る」動詞の意味	認知意味論・イベント構造	英>日

69	日本語ワ・ガ	機能文法・普遍文法	英＞日
70	日本語の格	Role and Reference Grammar (RRH)(Van Valin 1993等) Optimality Theory (OT)最適性理論	英＞日
71	日中韓英語の結果・進行態と完了性・非完了性	Smith (1991)アスペクト現象理論	英＞日
72	原型としての自・他動性	日本語の自・他動詞区対の意味解釈の分析	英＝日

理論的枠組みの文献

Chomsky, Noam (1993) A minimalist program for linguistic theory, in Hale, K and Keyser, SJ (eds), pp. 1-52.

————(1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA : MIT Press.

Dalrymple, M, Shieber, S & Pereira, S (1991) Ellipsis and higher-order unification. *Linguistics and Philosophy* 14, pp. 399-452.

Gibson, Edward (1998) Syntactic complexity : locality of syntactic dependencies. *Cognition* 68, pp. 1-76.

Goffman, Erving (1971) *Relations in public : miscrostudies of the public order*. New York : Basic Books.

Hale, K and Keyser, SJ (eds) *The View from Building 20 : Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, Cambridge, MA : MIT Press.

Halle, Morris & Marantz, Alec (1993) Distributed morphology and the pieces of inflection, in Hale, K and Keyser, SJ (eds), pp. 111-176.

Hopper, Paul & Thompson, Sandra A (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56, pp. 251-299.

Robison, RE (1990) The Primacy of Aspect : Aspectual Marking in English Interlanguage. *Studies in Second Language Acquisition* 12, pp. 315-330.

Schieffelin, Bambi and Ochs, Elinor (eds) (1986) *Language socialization across cultures*. Cambridge : Cambridge UP.

Smith, Carlota S (1991) *The parameter of aspect*. Dordrecht : Kluwer.

Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht : Kluwer.

Van Valin, Robert D Jr. (1993) A synopsis of Role and Reference Grammar. In Van Valin, Robert D Jr. (ed) *Advances in Role and Reference Grammar*. Amsterdam etc. : Benjamins.

3　分野別分類

言語研究の大まかな分野により分けると，表2のようになる。

表2　サンプルの分野別分類とサンプルに占める割合

研究分野	論文数	割合（四捨五入%）
文法研究	28	38.9
言語習得（成人8，児童9）	17	23.6
語用論・談話分析	11	15.3
心理言語学	5	0.7
社会言語学	4	0.6
意味論	3	0.4
音声・アクセント	2	0.3
応用言語学（言語テスト）	1	0.1
文章論（ナラトロジー）	1	0.1

文法研究がもっとも多いが，その枠組みに関して特徴的なのは，28篇中16篇(57%)が統率・束縛(GB)理論を使用しており，特にその最新のものである極小（ミニマリスト）理論が目立つ。海外で活躍している日本人を中心に，日本語のデータ，または日本語と他言語を比較したデータ（いずれも作例）によって理論の修正を主張したものである。

文法研究に次いで多いのは，言語習得と語用論・談話分析であるが，後者に関しては6編からなる特集号が組まれたことが影響した（下記4参照）。

なお，共時・通時的研究別に見ると，現代語に関する研究が大半で，歴史的研究は5編と，7%にも満たない。

4　特筆すべき点

4-1　日本語に関する特集号

まず，上記の特集号（Journal of Pragmatics）が挙げられよう（論文24-29）。「言語の社会化」はE. OchsやB. Schieffelinが1980年代の後半に発表した一連の研究を利用した概念だが，言語習得の中で親や教師などとの会話（特に，決まり文句）を通して社会のルールや価値観をいかに獲得していくかという観点からの談話分析である。特集号の論文はそれぞれ「こわい」などの情緒形容詞による社会化(24)，接尾辞チャウを使った否定的表現によるもの(25)，また日本の小学校におけるやりとりの中で，いかに他の生徒との協力体制が求められているかが示されている(26)。また，海外在住日本人児童の日本語イマージョン幼稚園の教室における縦断的研究による分析により，決まり文句の繰り返しによる日本語学習や同級生との協力体制を作り上げていることを示している(26)。27と28は日本語学習者（大学生）を対象としている。27の縦断的調査では，学習者同士の会話で相手の反応に対する協調的コメント（～ネ）を教師の会話から覚えていき，日本人の会話らしくなるプロセスが明らかにされた。28は(～ネ)の誤用の分析で，日本語学習者が英語の協調的発話に基づき（～ネ）を誤用する背景を分析している。

いずれも家庭・教育現場の会話を録音したデータの分析に基づくもので，「言語の社会化」という，日本語の分析としては新しい理論的な枠組みを使っている点に特徴がある。

なお，同じ雑誌の別の号に載った31番の論文は故人によるものだとお気付きになる読者がおられるかもしれないので，簡単に説明を加えておく。本論文は10年程前に投稿されたもので，掲載する方向でコメント付の原稿を著者に送り返したが，修正したものが届かなかったため掲載に至らなかった。しかし，著者の死亡後，編集者が日本を訪れた折り，修正された原稿の存在を知ったため，著者没後数年経ってから掲載されるという異例の事態となったことと，論文の冒頭に説明がある。

4-2　国語学などで扱っている問題に対する新しいアプローチの論文

その例として，テイルの意味を扱ったものを取り上げる。テイルを扱った論文が3編あるが，それぞれ従来の動詞の意味分類とは別の観点から扱っている。どの論文も，テイルが多くの言語で別の形態で表わされる（文法化された）進行相・結果相という両方の意味を表わせることを出発点としている。

論文71は金田一流のアプローチに近いが，C. Smithの枠組みを使っている。日本語（古典語・方言も含めて）を他言語と比較しながら，進行相・結果相はそれほどはっきり区別できない場合があることを論じたもの。日本語に限っていうと，「ケンは寝ている。」などの場合，同じ文がどちらの意味にも解釈できるものが少なくないから，テイルは二つの意味があるというよりは，状態の継続という，一つの意味を表わすとしている（あるいは，二つの意味が連続しているといってもよい）。同時に，いろいろな言語で文法化されている進行相・結果相という区別も，何らの形で話者の頭に存在するものと思われる。経験など，パーフェクトが典型的に表わす機能をもっている一方，習慣相など，インパーフェクト的な機能がある。Smithのインパーフェクトの定義では，パーフェクトの視点は出来事の始点や終点を含むのに対し，インパーフェクトはどちらも含まない。現代日本語のテイルはインパーフェクト標識で，Smithの出来事の時間経過の3段階の2段階（進行），または3段階（結果）を表わすが，初段階は一般に表わさない。ただし，著者もいうように，同じ文が二通りに解釈され得ることをどう説明するかの問題は残る。

論文16は形式的意味論の枠組みでテイルの二義性を扱っている。「ジョンは今食べている」と「ジョンはきちんと食べている」などと，副詞の分布で区別されることを確認した上で，一つの形態素がなぜ二つの意味に解釈されるかを次のように整理する。

	-te iru 1 （現行の状態を表わす）	-te iru 2 （経験を表わす）
継続動詞	継続	経験
瞬間動詞	結果状態	経験

両義性については，パーフェクトを表わす形態素テと，アスペクトを表わす補助動詞イルとに分けて，それぞれ形式意味論による分析で別の意味を表わすと主張している。「倒れる」のような瞬間動詞においても，連続的な出来事と解釈することによって，結果相の意味も包含される。

論文46は，テイルの二義性は動詞分類の違いによるものではないと主張したもの。ある出来事の時間的経過ではなく，動詞の表わす出来事に語用論上の知識を結び付ける結果であるstrength of evidence（SE，動詞の動作が認識可能な痕跡を残す度合）でより適切な説明が可能という。

同じ文に対して，二つの解釈が可能だということは，テイルそのものは進行・結果を区別しないことによる。むしろ，区別はある事態に対するわれわれの解釈によるものである。詳細は省くが，以下のように連続態としてSEが強いほど結果相の解釈になり，弱いほど進行相ととられる。

4-3　歴史的研究の一部概観

本節では，歴史的研究として国語学に貢献できると思われるものを取り上げる。

4-3-1　アクセント変化の原理

論文48は，超分節素の歴史的変化のメカニズムを扱っている。日本語のアクセントのどのパターンが規範的で，90年ほどの間にどのような変化が起こったか，山田美妙の『日本大辞書』（1892―1893）・NHKの『日本語発音アクセント辞典』（1943・1966・1985各年版）の資料の比較により名詞・形容詞に関するデータを集め，またインフォーマントを使っての調査も行っている。

名詞では，2つのパターンが圧倒的に多かった。平板型になる傾向がもっとも強く（73%），それについで後ろから3つ目のモーラに核があるもの（n-3というパターン，20%）。また，無声化母音にアクセント核がくる現象も珍しくなくなったことも判明した。また，インフォーマントのデータから，平板型でない形容詞では，テ形などが平板型と同じになる傾向が見られた。

形容詞の上記の歴史的変化は，類推の一種である「語形変化の一貫性」（paradigm coherence）または「同一レベル化」（leveling）の原理で説明できる。

「形容詞サ」という派生名詞の歴史的変化を見ると，例えば『日本大辞書』のハゲ┐シサは『日本語発音アクセント辞典』（1985）ではハゲ┐シサまたはハ┌ゲシ┐サとなっている。

すなわち，『日本大辞書』では，上記の名詞の規範的パターンである n-3 に適っているが，『日本語発音アクセント辞典』(1985) では n-3 と，名詞ではあまり好まれていないタイプである n-2 との間で揺れている（n-2 に落ち着いたシブトサが唯一の例外）。

この現象は，語形変化の一貫性原理が，規範的アクセントのパターンより強く働いていると説明される。また，シブトサ以外では，すべての場合に無声化母音にアクセントの核があるから，近来の標準日本語のアクセントは無声化母音の有無に敏感でなくなったことがここでも示されている。

ところが，英語でも同様な現象が報告されている。abdòmen から àbdomen に変わってきているという，やはり n-3 に変化するパターンが報告されている。ところが，この傾向に対抗する現象がある。prefèr（基本形）から prèferable（保守的）prefèrable（新規）が派生されるが，保守的な発音では n-3 パターンが使われるのに，新しい発音では（形態的に複雑な）語彙の「基本形の透明性」が優先される。こうして，全く別の言語でも，歴史的変化のメカニズムに共通の原理が働いている。

4-3-2　古代語の甲乙と一動詞の意味

論文 10 は，動詞トルが上代文献では甲乙類両表記が見られる現象に対し，大野透『万葉仮名の研究新訂版』(1977) や『時代別国語大辞典上代編』などの定説を出発点とする。大野が乙類の方を語源的とし，甲を強調形としたのに対し，このような甲乙類の使い分けが他に見られないことから問題があると先ず指摘する。また，『時代別国語大辞典上代編』(1967) では，「表記の混乱」としているが，本論文の著者は上記のどちらでもなく，両者がもともと別の動詞であったことを主張する。つまり，トル（甲類）は 'hold, support'（持っている，支える）を意味し，トル（乙類）は 'take, pick up, snatch, or capture'（とる，拾い上げる，奪う，捕える）の意味を表わしたもので，甲乙の区別が失われた結果同音となり，区別が失われたという。

その説を立証するために，『古事記』・『日本書紀』の例を検討する。まず，歌謡ではなく，地の文の訓注から検討を始める。『日本書紀』（古典文学大系・上 193 頁）の「撫劒此云都盧耆能多伽彌屠利魔辭屢」では，「撫劒」を「つるぎのたかみとり［甲］しばる」と訓んでおり，「しっかり握る」の意味でとれるとする。一方，『日本書紀』（同上，333 頁）の地名の訓注では次のような例がある。「且荷持田村，荷持此云能登利［乙］」。ここでは，表記に採用された漢字などから「荷持」は「手に取る」，「荷を拾い上げる」意味だとする。両者の意味は近いが，アスペクト上で区別が見られる。つまり，トル［甲］は状態を表わし，目標 (goal) となるものがないのに対し，トル［乙］の活動は，達成されるべき目標がある。つまり，前者は非限界相 (atelic) の動詞で，後者は限界相 (telic) の動詞ということになる。そして，上記の 2 例にもあるように，トルが複合動詞の一つ目として現われる場合，二つ目の動詞が限界相動詞である場合，トルも限界相動詞でなければならず，二つ目の動詞が非限界相動詞である場合，トルもまた非限界相動詞でなければ

ならないとした上で，古代歌謡・万葉集の例をすべて吟味し，上記の区別を立証する。

この発見のより大きな意味についても著者は言及している。オ列の甲乙の別が相補分布的で，異音だったとする松本克己説は否定され，また古代日本語は5母音だったという最近の説を支持するものである。

5　データ収集・分析と方法論の分離に関する国内・外協力の例

論文2は女房言葉と遊女語に関する歴史的な研究で，共著者二人は，海外著者（外者，テキサス大学オースチン校所属の日本人）と，国内著者（内者，早稲田大学所属の日本人）となっている。それぞれの分担については，註1に説明があり，内者は日本の職業言葉の歴史に関する資料や分析を提供し，外者が現行の言語とジェンダー研究の枠組みのなかで「国際的な読者」のために「イントロダクションし，ディスカッションを行った」。研究の大部分は歴史的なデータの分析・記述で，職業言葉が一般社会に浸透したプロセスを辿った内容が中心となっている。

その部分の前と後で，女性語に関する（英語による）従来の研究の流れが述べられている。日本の女性言葉に関する分析では，Lakoffの研究の影響で，日本女性が「どう」話し「なぜ」そのように話すかの分析が行われたが，一部の研究者からこのアプローチでは男性言葉が基準になり，女性語が社会の基準から外れた扱いになることで批判が出ている。最近の研究は，女性語の語用論的な機能の分析に移行し，直接の社会文化的なコンテクストにおける機能を明らかにしようとしているが，そもそも女性語はどのようにして成立したかという過程に関する研究はあまりない。そこで，本研究は，日本の女性語の起源を明らかにし，ジェンダー言葉全体における「どう」「なぜ」に関する新しい視点を提供するという。

結論の部分を簡単に紹介する（データとその分析に関する部分は省略する）。

女房言葉・遊女語はともに職業語から始まり，社会的変化に伴い一般社会に浸透した。こうした言葉のスタイルに附随していたイメージが一般社会に広がるにつれ変化し，江戸などの大衆文化・文芸作品などによって「女性らしさ」のイメージを作り上げた。

本研究では，女性語起原の歴史的な分析を行った。特に，ある社会における様々な話し方の発生や普及の動機になる特定の社会・歴史的因子に注目した。言語とジェンダーは，共時的分析だけでなく，言語・文化・社会が相互作用し，影響し合うプロセスの分析によりよく理解されるものと信じる。

以上のような内容が外者の貢献である。内者が英語の編集または翻訳などを行ったかどうかについては触れられていないが，内者が行った歴史的研究と分析に枠組やコメントを与えたことで，外者が筆頭著者になるという現象をみると，国際的に認められた枠組みで，国際的に読まれる言語を通して研究を発表することがいかに重要であるかを示す事例になると言えよう。

6　日本語研究，日本語参考文献抜きでも大丈夫

表1の「参考文献言語」欄を見ると分かるように，日本語で書かれた参考文献が英語のものを上回るケースが二つのみである。典型は，英語だけのものか，または英語が主で日本語で書かれたものが従であるという状況である。本来，後者のケースに関する数量的データを提供すべきだろうが，実は「英＞日」の場合でも，英語文献が圧倒的に多く，中には多少日本語文献が混じっている傾向が一目瞭然なので，一々数えなかった。

この現象は，論文の言語が英語であることとも当然関係しているが，その一方では，日本語で書かれた文献・論文を参考にしなくても十分に世界的なレベルの研究が可能であることが分かる。もちろん，日本発の枠組みが全く使われていないことも，その傾向に拍車をかけている。

付録　展望に利用した雑誌名と閲覧できた範囲（号）

（雑誌名はアルファベット順，同じ雑誌の複数掲載論文もアルファベット順）

Anthropological Linguistics　98 Vol. 40 1-4, 99 Vol. 41 1-2
Applied Linguistics　98 Vol. 19 1-4, 99 Vol. 20 1-4
Applied Psycholinguistics　98 Vol. 19 1-4, 99 Vol. 20 1-4
Australian Journal of Linguistics　98 Vol. 18 1-2, 99 Vol. 19 1-2
1　Jarkey, Nerida, Case Marking of Objects of Stative Predicates in Japanese, Vol. 19, No. 2, pp. 197-224

Babel　98 Vol. 44 1-4, 99 Vol. 45 1-3
Canadian Journal of Linguistics　98 Vol. 43 1-2
Cognitive Linguistics　98 Vol. 9 1-4, 99 Vol. 10 1-2
Diachronica　98 Vol. XV 1-2, 99 Vol. XVI 1
General Linguistics　98 Vol. 36 1/2
Historiographia Linguistica　98 XXV 1-3, 99 Vol. XXVI 3
International Journal of the Sociology of Language　98 Vol. 129-134, 99 135-139
2　Ide Risako and Terada Tomomi, The Historical Origins of Japanese Women's Speech : From the Secluded Worlds of "Court Ladies" and "Play Ladies", Vol. 129, pp. 139-156

IRAL (International Review of Applied Linguistics)　98 Vol. XXXVI 1-4, 99 XXXVII 1-4
Journal of the Association of Teachers of Japanese　98 Vol. 32 1-2, 99 Vol. 33 1
3　Everson, Michael E. and Kuriya Yasumi, An Exploratory Study Into the Reading Strategies of Learners of Japanese as a Foreign Language, Vol. 32, No. 1, pp. 1-21
4　Haugh, Michael, Native-Speaker Beliefs about *Nihonjinron* and Miller's "Law of Inverse Returns", Vol. 32, No. 2, pp. 27-58
5　Murakami Fuminobu, Using Epistemic Modal Suffixes and Sensation/Emotion Adjec-

tives to Determine Narrative Distance in *The Tale of Genji*, Vol. 32, No. 2, pp. 1-26

6 Suzuki Satoko, Marker of Unexpected Statements: An Analysis of the Quantative Particle *Datte*, Vol. 33, No. 1, pp. 44-67,

7 Tsujimura Natsuko and Aikawa Takako, Two Types of *Zi*-Verbs in Japanese, Vol. 33, No. 1, pp. 26-43

8 Watanabe Suwako, Concurrent Validity and Application of the ACTFL Oral Proficiency Interview in a Japanese Language Program, Vol. 32, No. 1, pp. 22-38

9 Wetzel, Patricia J., and Inoue Miyako, Vernacular Theories of Japanese Honorifics, Vol. 33, No. 1, pp. 68-101

Journal of East Asian Linguistics 98 Vol. 7 1-4, 99 Vol. 8 1-4

10 Bentley, John R., The Verb *Toru* in Old Japanese, Vol. 8, No. 2, pp. 131-146

11 Fukui Naoki and Takano Yuji, Symmetry in Syntax : Merge and Demerge, Vol. 7, No. 1, pp. 27-86

12 Kawashima Ruriko, The Structure of Extended Nominal Phrases: The Scrambling of Numerals, Approximate Numerals, and Quantifiers in Japanese, Vol. 7, No. 1, pp. 1-26

13 Nishigauchi Taisuke, 'Multiple Sluicing' in Japanese and the Functional Nature of *Wh*-phrases, Vol. 7, No. 2, pp. 121-152

14 Nishiyama Kunio, V-V Compounds as Serialization, Vol. 7, No. 3, pp. 175-217

15 Nishiyama Kunio, Adjectives and The Copulas in Japanese, Vol. 8, No. 3, pp. 183-222

16 Ogihara Toshiyuki, The Ambiguity of the *-te iru* form in Japanese, Vol. 7, No. 2, pp. 87-120

17 Shimoyama Junko, Internally Headed Relative Clauses in Japanese and E-Type Anaphora, Vol. 8, No. 2, pp. 147-182

18 Tsujimura Natsuko and Iida Masayo, Deverbal Nominals and Telicity in Japanese, Vol. 8, No. 2, pp. 107-130

19 Ura Hiroyuki, Checking Theory and Dative Subject Constructions in Japanese and Korean, Vol. 8, No. 3, pp. 223-254

Journal of Linguistics 98 Vol. 34 1-2, 99 Vol. 35 1-3

20 Fukushima Kazuhiko, Bound Morphemes, Coordination and Bracketing Paradox, Vol. 35, No. 2, pp. 297-320

Journal of Multilingual and Multicultural Development 98 Vol. 19 1-6, 99 Vol. 20 1-4/5-6

21 Richards, Brian and Yamada-Yamamoto Asako, The Linguistic Experience of Japanese Preschool Children and their Families in the UK, Vol. 19, No. 2, pp. 142-157

22 Yokota-Adachi Hiroko and Geva, Esther, Thinking of School and Learning in a Multicultural Context: A Comparison of Canadian Teachers and Japanese Parents, Vol. 20, No. 6, pp. 532-547

Journal of Phonetics　98 Vol. 26 1-4, 99 Vol. 27 1-3

23 Otake Takashi and Cutler, Anne, Perception of Suprasegmental Structure in a Non-Native Dialect, Vol. 27, No. 3, pp. 229-253, July 1999.

Journal of Pragmatics　98 Vol. 29 1-6, 98 Vol. 30 1-6, 99 Vol. 31 1-12

Special Issue on 'Language Socialization and Affect in First and Second Language Acquisition', edited by Ruth Kanagy, Vol. 31, No. 11, pp. 1393-1525. Kanagy, R., Introduction, pp. 1393-1396

24 Clancy, P. M., The Socialization of Affect in Japanese Mother-Child Conversation, pp. 1397-1421

25 Suzuki, R., Language Socialization Through Morphology: The Affective Suffix *-CHAU* in Japanese, pp. 1423-1441

26 Cook, H. M., Language Socialization in Japanese Elementary Schools: Attentive Listening and Reaction Turns, pp. 1443-1465

27 Kanagy, R., Interactional Routines as a Mechanism for L 2 Acquisition and Socialization in an Immersion Context, pp. 1467-1492

28 Ohta, A. S., Interactional Routines and the Socialization of Interactional Style in Adult Learners of Japanese, pp. 1493-1512

29 Yoshimi, D. R., L 1 Language Socialization as a Variable in the Use of *ne* by L 2 Learners of Japanese, pp. 1513-1525

30 Ide Risako, 'Sorry for your kindness': Japanese Interactional Ritual in Public Discourse, Vol. 29, No. 5, pp. 509-529

31 Kumatoridani Tetsuo, Alternation and Co-occurrence in Japanese Thanks, Vol. 31, No. 5, pp. 623-642

32 Lerner, Gene, H. and Takagi Tomoyo, On the Place of Linguistic Resources in the Organization of Talk-in-Interaction: A Co-investigation of English and Japanese Grammatical Practices, Vol. 31, No. 1, pp. 49-75

33 Rinnert, Carol and Kobayashi Hiroe, Requestive Hints in Japanese and English, Vol. 31, No. 9, pp. 1173-1201

34 Suzuki Satoko, *Tte* and *nante*: Markers of Psychological Distance in Japanese Conversation, Vol. 29, No. 4, pp. 429-462

Journal of Psycholinguistic Research　98 Vol. 27 1-6, 99 Vol. 28 1-6

35 Kayamoto Yuriko, Yamada Jun and Takashima Hiro-omi, The Consistency of Multiple-Pronunciation Effects in Reading: The Case of Japanese Logographs, Vol. 27, No. 6, pp. 619-637

36 Sasaki Yoshinori, Processing and Learning of Japanese Double-Object Active and Causative Sentences: An Error-Feedback Paradigm, Vol. 27, No. 4, pp. 453-479

37 Sekiguchi Takahiro and Nakajima Yoshiaki, The Use of Lexical Prosody for Lexical Access of the Japanese Language, Vol. 28, No. 4, pp. 439-454

Journal of Sociolinguistics 99 Vol. 3 1-4

Language 98 Vol. 74 1-4, 99 Vol. 75 1-4

38 Babyonyshev, Maria and Gibson, Edward, The Complexity of Nested Structures in Japanese, Vol. 75, No. 3, pp. 423-450

39 Hagiwara Hiroko, Sugioka Yoko, Ita Takane and Kawamura Mitsuru, Neurolinguistic Evidence for Rule-Based Nominal Suffixation, Vol. 75, No. 4, pp. 739-763

40 Kuno Susumu, Takami Ken-ichi and Wu, Yuru, Quantifier Scope in English, Chinese, and Japanese, Vol. 75, No. 1, pp. 63-111

Language Learning 98 Vol. 48 1-4, 99 Vol. 49 1-4

41 Mori Yoshiko, Epistemological Beliefs and Language Learning Beliefs: What Do Language Learners Believe About Their Learning?, Vol. 49, No. 3, pp. 377-415

42 Shirai Yasuhiro and Kurono Atsuko, The Acquisition of Tense-Aspect Marking in Japanese as a Second Language, Vol. 48, No. 2, pp. 245-279

Language Learning Journal 98 No. 17-18, 99 No. 19-20

Language and Speech 98 Vol. 41 1-3/4, 99 Vol. 42 1-2/3-4

43 Koiso Hanae, Horiuchi Yasuo, Tutiya Syun, Ichikawa Akira and Den Yasuharu, An Analysis of Turn-Taking and Backchannels Based on Prosodic and Syntactic Features in Japanese Map Task Dialogs, Vol. 41, No. 3-4, pp. 295-321

44 Koiso Hanae, Shimoyama Atsushi, Katagiri Yasuhiro, Collaborative Signaling of Informational Structures by Dynamic Speech Rate, Vol. 41, No. 3-4, pp. 323-350

Language in Society 98 Vol. 27 1-4, 99 Vol. 28 1-4

Language Sciences 98 Vol. 20 1-4, 99 Vol. 21 1-4

45 Inoue Kyoko, The Origin and the Development of the Concept *Jinkaku*—An Important Concept in Japanese Morality, Vol. 21, No. 3, pp. 265-281

46 Nara Hiroshi, Strength of Evidence and the Semantics of the Japanese *-te iru* Aspect Affix, Vol. 21, No. 4, pp. 423-447

Language Testing 98 Vol. 15 1-3, 99 Vol. 16 1-4

47 Sasaki Miyuki and Hirose Keiko, Development of an Analytic Rating Scale for Japanese L 1 Writing, Vol. 16, No. 4, pp. 457-478

Language Variation & Change 98 Vol. 10 1-3, 99 Vol. 11 1-2

48 Hattori Noriko, Base Transparency in Suprasegmental Changes: Ongoing Changes in Japanese and English, Vol. 10, No. 2, pp. 85-96

49 Takano Shoji, A Quantitative Study of Gender Differences in the Ellipsis of the Japanese Postpositional Participles *-wa* and *-ga*: Gender Composition as a Constraint on Variability, Vol. 10, No. 3, pp. 289-323

Lingua　98 Vol. 104 1/2-3/4, 105 1/2-3/4, 106 1-4
99 Vol. 107 1/2-3/4, 108 1-2/3-4, 109 1-4

50 Maki Hideki, Kaiser, Lizanne and Ochi Masao, Embedded Topicalization in English and Japanese, Vol. 109, No. 1, pp. 1-14,

51 Ochi Masao, Some Consequences of Attract F, Vol. 109, pp. 81-107

52 Tanaka Hidekazu, LF Pied-Piping of In-situ Wh-Phrases, Vol. 109, No. 3, pp. 183-194

Linguistic Inquiry　98 Vol. 29 1-4, 99 Vol. 30 1-4

53 Bošković Željko and Takahashi Daiko, Scrambling and Last Resort, Vol. 29, No. 3, pp. 347-366

54 Hoji Hajime, Null Object and Sloppy Identity in Japanese, in Remarks and Replies, Vol. 29, No. 1, pp. 127-152

55 Saito Mamoru and Fukui Naoki, Order in Phrase Structure and Movement, Vol. 29, No. 3, pp. 439-474

The Linguistic Review　98 Vol. 15 1-2/3-4, 99 Vol. 16 1-2, 4

56 Koizumi Masatoshi, Invisible Agr in Japanese, Vol. 15, pp. 1-39

Linguistics　98 Vol. 36 1-6, 99 Vol. 37 1-6

57 Kanno Kazue, The Stability of UG Principles in Second-Language Acquisition : Evidence from Japanese, Vol. 36, No. 6, pp. 1125-1146

58 Maynard, Senko K., Grammar, With Attitude : On the Expressivity of Certain *da* Sentences in Japanese, Vol. 37, No. 2, pp. 215-250

The Modern Language Journal　98 Vol. 82 1-4, 99 Vol. 83 3

59 Long, Michael H., Inagaki Shunji and Ortega, Lourdes, The Role of Implicit Negative Feed-back in SLA : Models and Recasts in Japanese and Spanish, Vol. 82, No. 3, pp. 357-371

60 Mori Yoshiko, Effects of First Language and Phonological Accessibility on Kanji Recognition, Vol. 82, No. 1, pp. 69-82

61 Sung Hyekyung and Padilla, Amado M., Student Motivation, Parental Attitudes, and Involvement in the Learning of Asian Languages in Elementary and Secondary Schools, Vol. 82, No. 2, pp. 205-216

Multilingua　98 Vol. 17 1-2/3-4, 99 Vol. 18 1-2/3-4

62 Locastro, Virginia, A Sociocultural Functional Analysis of Fragmentation in Japanese, Vol. 18, No. 4, pp. 369-389

63 Mishina Satomi, The Role of Parental Input and Discourse Strategies in the Early Language Mixing of a Bilingual Child, Vol. 18, No. 4 pp. 317-342

Natural Language and Linguistic Theory　98 Vol. 16 1-4, 99 Vol. 17 1-3

64 Grewendorf Günther and Sabel Joachim, Scrambling in German and Japanese : Adjunction versus Multiple Specifiers, Vol. 17, No. 1, pp. 1-65

65 Takano Yuji, Object Shift and Scrambling, Vol. 16, No. 4, pp. 817-889

66 Tanaka Hidekazu, LF WH-Islands and the Minimal Scope Principle, Vol. 17, No. 2, pp. 371-402

Phonetica 98 Vol. 55 1/2-4, 99 1/2-3/4

67 Ejiri Keiko, Relationship between Rhythmic Behavior and Canonical Babbling in Infant Vocal Development, Vol. 55, No. 4, pp. 226-237

Research on Language and Social Interaction 98 Vol. 1 1-3, 99 Vol. 32 1/2-4

Studia Linguistica 98 Vol. 52 1-3, 99 Vol. 53 1

Studies in Language 98 Vol. 22 1-2/3, Vol. 23 1-3

68 Kita Sotaro, Japanese Enter/Exit Verbs Without Motion Semantics, Vol. 23, No. 2, pp. 307-330

69 Koyama Wataru, Reference Entailment and Maintenance Mechanisms in Universal Grammar of Japanese, Vol. 23, No. 1, pp. 105-147

70 Nakamura Wataru, An Optimality-Theoretic Account of the Japanese Case System, Vol. 23, No. 3, pp. 597-649

71 Shirai Yasuhiro, Where the Progressive and the Resultant Meet Imperfect Aspect in Japanese, Chinese, Korean and English, Vol. 22, No. 3, pp. 661-692

Theoretical Linguistics 98 Vol. 24 1-2/3, 99 Vol. 25 1

72 Ono Kiyoharu, Intransitive-Transitive Phrase Pairs in Japanese, Vol. 25, No. 1, pp. 15-29

Transactions of the Philological Society 98 Vol. 96 1-2, 99 Vol. 97 1-2

——筑波大学教授——